

『▽レナさん

宇宙人から指示が来ました。A建設商事を殲滅せよとのことです。今日か明日中におねがいます。この会社の所在地は後で送ります △父』

出撃要請のメールが入った。どこことなく緊張感の欠如が感じられるのは、我が地球防衛隊が家族経営であるためだ。この脱力した身内の環境は、私のように乱暴で破廉恥な不良風スーパースヒロインには丁度良い。

父は地球防衛隊日本基地司令官。宇宙人から提案される戦闘企画の中から、私に危険が及ばないものを選んでくれる。今回の殲滅作戦の標的であるA建設商事という組織も、おそらく軍事能力の無い普通の民間建設会社。私の体には傷すらつけられず、無抵抗に退治されるだけ。

『▽パパ

本社ビルを壊せばいいの？ △レナ』

『▽レナさん

そう、やり方は任せたよ。安全第一で、がんばって △父』

基本的に戦術は私に一任されていて、完全な現場主義。私の戦闘能力に全て託されている。思えばどこことなくいい加減な、宇宙人からの丸投げ仕事。情報も少ないし、戦闘目的も曖昧。とにかく私が現場に行つて壊したり退治したりする事が出来ればいい。

なので、かなり自由に自身のヒロイン観を演出している。強大な力を持つ無敵の巨大戦士、に加えて、乱暴で恐い一面を持つきびしい戦闘ヒロインだ。目的の為には手段を選ばず、どん

なに多くの犠牲を出しても顧みない、また、無敵である事の余裕として淫らな性癖も隠さない。露出しすぎのセクシーな姿で、破廉恥な悪戯を見せつける。巨体を使って建物に悪戯したり多少は破壊もしてしまつて、逆に人類社会に問題なぐらいが丁度良い。命がけで戦う対価として、この自己演出は当然の権利だと思つている。

基地から飛び立つ直前に衣装に着替える。セクシーな衣装は戦う意欲を盛り上げる重要な要素。とてもエロティックな半裸の姿だけど、それがトレードマーク。この衣装の調整には弟が熱心に携わつている。今日も出撃台まで弟が見送りに来て、衣装のチェック。

「ピンヒールだから着地に気をつけて。新しいコスチューム超似合つてるよ。あ、こっ」

腰の上の小さな光沢の差を見つけ出す。素材の管理液が少し残つていた。専用ウエスでなじませると光沢レオタードは完璧な仕上がり。弟にはこういう才能があるのだ。

「有り難う！行つてくるわね」

現場住所を頭に入れ、ロングブーツのピンヒールを蹴つて基地を飛び立つ。飛行は重力をコントロールする地球外技術。上空で巨大化して雲の上を飛行すると、大気との摩擦で生まれた静電気が楽しい。背面と正面との電位差で、体の先端から青白く稲妻が放電する。我が身の大きさを実感する物理現象は他にもあり、どれも楽しく美しい。そして巨体を町の中に着地させるとき、少し乱暴に何かを踏み潰してしまうのがお決まりの演出。午後の活気も佳境の時間、人であふれるオフィス街、車と人で一杯の大通りに両脚のブーツを乱暴に踏み降ろした。ズッシーン！

重い衝撃音とともに土煙をあげ、歩行者や渋滞中の車をペシャンコに踏み潰して着地した。体の正面に目標の悪の会社、本社ビル。

「ふう、A建築商事はここね。覚悟しなさい！」

見下ろすと、中の人々がよく見える。何の前触れもなく突然現れた半裸の巨人に呆気にとられて、放心した表情で見上げていた。私が来た目的をわからせる必要があるそう。

「とう！」

まずはいきなり隣りのビルを蹴り倒してやる。標的とは別の会社で無関係なのは知っているが、犠牲になつてもらう。建物を内部の人間諸共に乱暴に蹴倒すのを見せつけて、私の怒りを思いつきり表現。

「建物から出ないで！」

誰も逃がさないと宣言のために、足元付近の人間を、容赦なくことごとく踏み潰す。巨体とは思えない速度で両脚を躍動させて動くものを全て磨り潰した。

「誰だろうと知るもんですか。とつても怒っているのよ！」

足を大きく開いて、血で真っ赤になったアスファルトを踏みしめ、下半身をビルに近づけてやると、一斉に窓から離れて奥の部屋に逃げてくゆく。ビルの中で移動したって、私の攻撃から逃げられないのに。

「あなた達が何をしたか、わかってる？」

サドの気がある私は、こうして脚を開いて糾弾する時が堪らなく大好き。冷たい目で見下ろ

すと、人間達が恐れ慌てるさまが見て取れる。巨大でエロティックな股間に頭上を覆われて、屈辱と絶望に圧倒され、なんとか助かろうといろいろな態度を取り始める。私から逃げようと模索しビル内はパニック状態、私もそれを受けて興奮が高まって行く。

ちなみに、この会社の悪事なんか、まるで知らされていない。知るまでもなく、地球平和に對する脅威には自動的**に強い怒りを覚える**。私は、善悪に關してはとても単純な性格なのだ。

腰の動きに少しエロティックな熱を帯びさせると、突然、室内の人々が窓に殺到してきた。眼前を覆う私の股間の状態を見て、そのあまりに破廉恥な光景に驚愕しているのだ。ビルを蹴り倒しているあたりから、すでに深い興奮状態に入っていた。こめかみがグツと重い熱を帯び、軽い難聴と唾液の大量分泌。下腹部の中心がしびれ、微かに痙攣し、愛液が溢れ始めるのを感じた。それからほんの数秒で股間は愛液でヌルヌルの状態。ベツトリと濡れたストリングレオタードの両脇から粘液が漏れ出して股間がてらてら光つてる。

「わかつたかつて聞いているの」

自らの罪を十分自覚させ、罰を受けても仕方ないと諦めさせて、贖罪に震えながら膝をつき、罪の重さを覚悟の深さに変えて私を見上げるようになるまで。周りの建物を犠牲にし威嚇を続ける。

「見てなさい。こうしてやるわよ！」

向かいのビルにゆっくり跨がると、腕を振り上げて力こぶを作ってみせる。跨がられたビルの中から響く大勢の悲鳴が遙か上空の私の耳まで届いてくる。罪の無い沢山の人が中に居るのが

わかるけど、今更躊躇などしない。屋上めがけて一気に股間を激突させた。空の段ボールに座るみたいにくしゃくしゃに潰れてしまう。瓦礫がお尻の割れ目にめり込んで肛門を刺激する。前の割れ目にも粉々になったビルの破片が擦り込まれてくる。

「あああん！すっごい！」

思わずエロい声が出ちゃう。顔も火照つてきて、真っ赤のはず。破壊に興奮して紅潮しているのは恥ずかしいけど、これも威嚇に絶大な効果がある。正義の味方が暴力に快楽を覚えているなら理性的な温情は望めないし、許してもらえない、そんな絶望感を与えられる。砕け散る瓦礫と粉塵の中で身をくねらせながら立ち上がると、股間から粘液が大量に漏れ出し、泡で白濁した糸を太腿の間に引いた。ここまで体の反応を見られては、もはや破壊で興奮してしまっているのを隠しようもないが、あくまでも立場は正義の味方である。

「悪い会社は私達の敵なのよ！しっかり罪を理解しなさい！」

隣の出版社のビルに跨がると今度はあからさまにエッチな行動を見せつけてやる。大きく脚を開いて哀れなビルに跨がって、右手を前から下腹部に回し、左手をお尻の方に回す。そして、優しく腰を下ろして屋上に股間を接地させると、それぞれの掌を大きく開き、人々が不安で身を寄せ合っていたビルの最上階を前後から掻き崩して太腿の間に押し込んだ。凄まじい破壊音に我ながら圧倒される。中の人々にとって絶望的な音。それに加え、股間の敏感な部分に当たる感触は、独特の背德的刺激がある。ウエハースなどの乳児の食材を砕きながら押しつけている様な、食材を使ったオナニー独特の禁断の悪戯感覚。

ケーキに跨がってスポンジをすくい取るみたいに、クリトリスと肛門に擦り込むように手を動かし、次から次へとビルを千切り股間へと送り込む。ビルは上から徐々に雀り取られて太腿の間で粉碎されてゆく。いちいちスゴイ快感。クライマックスに向かって腰を激しくくねらせて、半分ほどの高さでエクスタシーに達してしまった。

思いつきり左右に股間を開いてM字開脚をながら一気にビルを押し潰した。この粉碎された建物も悪徳会社とは無関係のものだ。すでに三棟のビルを破壊してしまった。興奮して暴走気味の自分にうつすらと気が付くが、まだいつもの威嚇表現として許容範囲だ。

「はああああああん！」

ビショビショに濡れたレオタードの上から、勃起したクリトリスがはつきり見える。ヒロインコスチュームにつきものの白いラバーの手袋も適度に張り付き、股間を擦るのに好都合な摩擦感。きれいな衣装がエッチな物質で汚れてゆくのも堪らない。おもわず指の匂いを嗅いでしまう。すつごく淫猥な汚れた臭い。汗とオシッコと愛液の混合物。

「あん！エロい匂い」

お尻の穴を擦る左手も、少し勇気を出して嗅いでみる。

「ああ、強烈！」

Tバックで肛門がはみ出し気味なので、汚れた肛門の匂いなんかも隠せずにプーンと擬音がするほど染み出している。

「さあ、この下半身でめっちゃめっちゃにしてやるわ」